

日高教定通部連

2009年10月1日

No. 44

発行：日高教定通部

teitu@nikkokyo.

zenkyo.org

2009年 全国定通学習交流集会 in 福島②

今回は、全国定通教育学習交流集
会で行なわれた講演「「までい教育」
の村づくり」（福島県飯館村教育長
廣瀬要人さん）の要旨をお知らせ
します。



講演「までい教育」の村づくり 福島県飯館村教育長 廣瀬要人さん



講演の廣瀬要人 飯館村
教育長

36年間12校で国語の教員経験があり、20代の時に1年間だけ定時制の兼務経験もあります。

よく「どういう理念で子どもに接するのか」と問われます。その時に万葉集の山上憶良（やまのうえのおくら）の歌を引用します。

国語の教科書に載っている「白金も黄金も珠も何

せむに勝れる宝子にしかめやも」という歌です。銀も金も宝石もすばらしい宝物だけれども、どんな宝物よりも子どもが大切という意味です。教育の原点は子どもを愛してやまない心が原点です。

合併せずに自立の道を選択

平成の大合併がありました。飯館村は合併せず自立の道を選択。昭和30年代は1万人の村でした

が現在6,000人の人口となっています。来年度（平成22年度）65歳以上の高齢化率は27.96%、生産人口率は57.48%、14歳以下の子どもの人口率は14.56%となる予定です。昭和55年と比較すると、子ども人口率が10%も減少し、高齢化率は16%も増加しており、少子高齢化が顕著に現れています。こういう実態をふまえて、どういう村づくりをするか模索しています。大きな企業が村にないので多くの村民は近隣の企業に通って勤務し収入を得ています。村民所得は県内の市町村の中でも下から数えた方が早いぐらい低い所得です。村の本年度予算は42億円で自主財源は約2割です。あとは地方交付税と国からの交付税で村の財政を組んでいます。依存財源で、ほとんど補助事業が多いです。

2つの幼稚園、3つの小学校、1つの中学校、1つの高校（分校）があります。少子化から小学校では複式学校が出てきました。また、高校の分校の存続問題も村の大きな課題になっています。分校を出るだけ残すように死守、支援につとめています。

「までい」＝「両手で」「丁寧に」「心を込めて」

飯舘村の村づくりは平成 16 年に「飯舘村第 5 次総合振興計画“大いなる田舎 までいライフいいたて”」を策定しました。なぜ「までいライフ」プランなのか。「効率と速さ」を求めてきたこれまでの生活をもう一度見直してみようじゃないか。スピードと効率の名の下に失ったものが非常に多い。背丈にあった村づくりをしようじゃないか。その時にスローライフという理念が出てきましたが、しかし貧しい生活をしているのに「スローライフとは何事か」と村民に受け入れられませんでした。

これと近い地元の言葉がないか。古語辞典にも載っている「までい」言葉を探し出しました。「までい」の語源は「真手」「諸手」という意味です。「までいに」ということは「両手で」「丁寧に」「心を込めて」という意味です。「までいにご飯を食べろよ」とは「丁寧にご飯を食べなさい」、「親父に買ってもらった服をまでいに着ろよ」とは「粗末にするなよ」という意味です。「までい」と言う言葉をキーワードに村づくりの理念の一つの柱にしていこうと作成したのが「飯舘村第 5 次総合振興計画までいライフプラン」です。飯舘村では人間本来の楽しく、美しく、心安らぐ、笑顔あふれる村づくりをしたいと「までいライフ 5 つの宣言」をつくりました。1 つ目は「人と地域のつながりを“までい”に」、2 つ目に「からだど大地を“までい”に」、3 つ目に「家族の絆を“までい”に」、4 つ目に『食』と『農』を“までい”に」、5 つ目に「ひとづくりを“までい”に」の 5 つです。それぞれの分野でこの具現化に努めています。

エコロジカルな村づくり

「までい」の理念に基づいて飯舘村の村づくりの基本理念を踏まえた「飯舘村の 6 つの将来像」はどういうものか。1 つは「感性豊かで自立心のある“共育”を大切にする」、「共育」の「共がともに育つ」がポイントで、「教育は共育である」、教育は教えることは共に育てる、共に育つという意味もあります。2 つ目、「いたわりあい」と「支えあい」

の優しい笑顔と心が満ちた村」、3 つ目「からだど大地のいのち・健康を支える循環型の村」、4 つ目「“までいな暮らし”を支える舞台や仕組みの整った村」、5 つ目「農的な暮らしとともに飯舘流の産業が息づく村」、6 つ目「一人ひとりが生き方や暮らしに誇りを持ち、笑顔あふれる村」。「こういう村にしたい」ととりくんでいます。今年で 5 年目に入ったので中間評価しようということで、福島大学に「飯舘学」という飯舘村の研究する講座がありますので、講座の先生方や学生さんにもご協力いただいて飯舘村の「までいライフプラン」についての中間評価をする予定です。

今年度は本村らしい地形・風土をいかして地球環境に配慮したエコロジカルな村づくりの拠点として、環境庁の支援によるエコハウス「いいたて村までいな家」を建てることになりました。1 億円のモデルハウスができます。ここを使って「環境教育をしていこう」、「環境に関する発信をしていこう」ということで今年度中に工事が完了します。「までいライフ」は環境教育とのかかわりが深くなり、「までいライフプラン」を推進する一つの拠点としてエコハウスが活用できるようになると期待しています。

「までい教育」とは

「までい教育」とは、子ども達に自ら学ぶ意欲や時代の変化に柔軟に対応できる「生きる力」を身につけさせるために、「あら探しの教育ではなく宝探しの教育」「減点法の教育ではなく加点法の教育」に努め、子ども達に“自信と誇り”を持たせ、知育・徳育・体育のバランスの取れた教育を丁寧に・手間暇惜しまず・心を込めて行なうことです。「までい教育」では、「自己存在感を与える」「自己決定を促す」「人間的触れ合いを基盤とする」という生徒指導の機能を生かし、学校・家庭・地域が手を携えて教育に当たる“共育”を重視します。

「あら探しの教育ではなく宝探しの教育」は特別支援教育の中で使われていたようですが、「これができない」、「あれができない」という教育ではなく、「子どもたちの持っている宝を探していこう」これ

が教育だろう。減点法ではなく「これが出来るようになった」「これも出来るようになった」という加点法の教育をしていこう。通知票も変わります。相対評価でなく、絶対評価になりますが個人内評価を取り入れていきます。この理念がうまくいくのではと考えています。

児童生徒の足を確保

「までい教育」の実践例として一部を紹介します。飯館村だからやらなくてはならない事業として年間4,400万円かかる「スクールバス運営事業」。交通機関がなく車か歩くしかありません。小中学校まで遠い子どもは30kmもあります。現在スクールバス7台を朝夕走らせます。幼稚園・小学校・中学校・高校の児童・生徒の登下校に利用させています。朝は1回で済みますが、夕方は幼稚園・小学校・中学校・高校とそれぞれ下校時間が違います。中学校などでは部活動が6時頃までやっていますので夕方はバスを3回に分けて運行しています。村の教育を成立させるためには欠かせられない事業です。

全国の町村の教育長の集まりがありますが、「子どもたちの足をどう確保するのか」が非常に大きなテーマになっています。本村でも大きなテーマになっています。費用はかかりますが欠かせられない事業です。

子どもたちに自立心と達成感を

年間予算70万円の「やったね！事業」は、村の予算を子どもたちに与え、自分たちで企画し運営して欲しい、子どもたちに自立心と達成感を得させようという事業です。

昨年度はコンサートを実施し大変感動的な場面になって子どもたちも達成感をえました。

今年度は、中学校の前庭が舗装されていないので、村で勝手に提示するのではなく、子どもたちに前庭のデザインコンクールをしてもらおう予定(20万円)です。あとの50万円は子どもたちがイベントの企画をしています。「やったね！教育」で「生きる力」をつける事業です。



いいたて合宿通学事業

年間予算89万円の「いいたて合宿通学事業」は、親元を離して学校に通学させる事業です。対象は5年生・6年生、期間は8日間です。自分たちで料理、洗濯、勉強をします。そして学校に1週間通うという事業です。その間、親とまったく連絡をとらせません。携帯電話も持ち込み禁止。何かあったときは教育委員会の方から親に連絡をとります。思いやり、忍耐力、自立心、協調性、親のありがたみをわからせる、同時に親が子どもの良さを再認識するというねらいの多い事業です。1週間子どもたちを預かるわけですから運営は大変です。村の青年たちに協力していただいて実施しています。

3つの小学校から中学校に集まってくるので、中学1年生でトラブルが起きたりします。あるいは人間関係に神経を使い過ぎて、勉強がうまくいかないとか友だち関係がうまくいかないという中一問題が出てきます。そういう問題を解決しようというねらいもあります。中一問題を意識した事業はいろいろやっています。予算の関係でやめてしまいましたが福島空港に飯館村の子どもたちを連れて行き、飛行機をチャーターして飯館村・自分の村を上空から見させるという事業を数年間続けました。子どもたちは非常に感動します。

自分の村の良さや問題を見てみよう

年間予算427万円の海洋アドベンチャースクール事業は小学6年生が対象です。今年も7月26日から村の三つの小学校から、北海道に4泊5日の研修に行きました。親元を離れて北海道を学び、外から飯館村を見てみようという意図があります。そして自分の村の良さや問題を見てみようという事業

です。これも中一問題を解決する手立てにしたいというねらいがあります。班編制も学校の枠を外して編制しますので相互理解できるいい機会になります。仙台港までスクールバス、フェリーに乗って苫小牧から倶知安に行きます。倶知安をベースに研修します。毎年、倶知安の子どもたちも飯館の子どもたちとの交流を楽しみにしています。船に 2 泊、ホテルに 2 泊。村の経済力に似合わない贅沢な事業です。

児童・生徒の学力向上に

中学校学力向上支援事業、別名「村塾事業」は高校進学を希望する 3 年生を対象に補習授業です。村には塾は一切ありません。学校さえ選ばなければほとんど入れるので、子どもたちの進学意欲が弱いのです。進学にあたって学力向上を図り、少しでも選択の幅を広げたい。今年度からはじめる事業です。予備校と業務提携をして夏休みに 10 日間 30 時間、9 月以降は毎週土曜日 20 日間 60 時間を予定しています。会場は公民館を使うのですが、どうせやるのならば、議会議場を借りて塾をやりたいと提案しましたら待ったがかかりました。「議会は神聖な場所だからダメだ」と。この話を聞いたある新聞記者が「子どもは不純なのか」と言ってくれましたが、いずれにしても議場は許可になりませんでした。一切無料です。テキスト代だけは負担してもらいます。残念ながら村の半分ぐらいしか希望していません。今年の成果をあげて将来的には 9 割の子が村塾を受けられるようにしたいです。予算は 60 万円ぐらいです。30 日ぐらいではそんなに学力は高まらないと思いますが進学にたいして動機付けになるのではと思っています。

小・中学校学力向上推進事業は小中学校の算数・数学科、国語科の担当教員でプロジェクトチームをつくり、授業のあり方、家庭学習のあり方の検討、飯館版マニフェストの作成、ワークシートの作成等を行い、小学 1 年生でここまで、中学 3 年生にはここまで、という到達目標を先生方に考えてもらう児童・生徒の学力向上に資する事業です。

村の県立高校を応援

県立相馬農業高校飯館校は、昭和 24 年県立相馬農業高校大館分校（農業科、家庭科）として設立。昭和 34 年、町村合併により飯館分校と改称し、平成 8 年に全部普通科に改編。平成 20 年には県立相馬農業高校飯館高と改称しました。全校生徒 90 人、教職員 15 人。生徒の半分は飯館村、半分は飯館村外から入学しています。

なぜ普通科になったのか、なぜ飯館分校から飯館校になったのか。村に「相農飯館校を愛し支援する会」があります。相農飯館校の存続と教育環境の充実を図るため、同窓会、PTA、教育委員会等村関係機関により平成 18 年に設立された団体で、要望活動が切っ掛けでした。

飯館校になった理由は分校だと子どもたちが卒業時に引け目を感じることもあることから飯館校にしようという考え方から学校名を改称しました。子どもたちに誇りを持たせる環境にすることです。

県立高校ですが村で応援できることは応援しようと 147 万円の教育活動の補助支援しています。

飯館校生だけではありませんが奨学金貸し付け事業 3,900 万円は経済的理由による就学困難のある高校・大学・専門学生に奨学金貸し付けしています。医学部等に在学する大学生は月額 6 万円ですが村内出身飯館校卒業生には月額 7 万円、1 万円は返還しなくてもよいのです。保健師・助産師・看護師等養成学校は 5 万円ですが村内出身飯館校卒業生は 6 万円借りられます。1 万円の優遇措置があります。村の農協からお金を借りたときの「大学入学篤志奨学金」利子は補填しましょうという事業です。

最も重要な環境は教師

「環境は人をつくる」と言われています。最も重要な環境は教師だと思っています。「村の教育ビジョン」の教師像を紹介します。教師像の 1 つは誇りと情熱と使命感を持って教育にとりくむ教師。2 つ目は児童・生徒に自信と誇りと夢を与える指導力のある教師。3 つ目は明朗公正で包容力のある人間性豊かな教師であってほしい。子どもは信頼できるもののみ心をひらきます。